エッセイ

世界へ 世界から

顔から性格がわかるか？
―顔学と人相学―

原島 博

はらしま　ひろし／1945年生まれ。東京大学大学院情報学環教授、日本顔学会会長。1980年代半ばから「人と人の間のコミュニケーションを技術の立場からサポートする」ことに関心をもち、顔画像処理を中心とする「感性コミュニケーション」などの研究にも力を注いでいる。『感じる・楽しむ・創りだす感性情報学』（工作舎、共著）など著書多数。

わたしの専門はコミュニケーション工学ですが、二〇数年前から人の顔にも関心をもち始め、一九九五年には「日本顔学会」という学会を設立するお手伝いをしました。今では会員約八〇〇人の学会に育っています。

日本顔学会では「顔学」を研究のテーマとしています。でもそれは今でも「人相学」と間違われます。そのようなとき、わたしは次のように説明することにしています。「ある顔を見たときに、周りがその人のたとえば性格に関して同じような印象をもつとすれば、それが何故であるかを探ることは顔学である。でもその印象が本当であるかまでは踏み込まない。顔学は顔から性格を当てたり、未来の運命を予言するまでには至っていない」。

でも、このように答えても相手はしつこく聞いてきます。「先生はわたしの顔を見て性格がわかりますか？」

それに対してどう答えたらいいか、正直言って困ります。表情まで含めて観察すればもしかしたら六〇～七〇パーセントくらいの確率でわかるかもしれません。でも顔学者としては、それを相手に言うかどうか迷います。もしわたしが人相見であれば、そのくらいの確率で言い当てたら、相手は拍手喝采するでしょう。でも顔学者としては、当たらなかった方の残りの確率を気にします。もしそれが何らかのかたちで社会的な差別に結びついたら・・・。

さらに本質的な問題もあります。もし顔と性格のあいだに相関があるとしたらですが、それは「性格が顔にあらわれた」のでしょうか。それとも「顔が性格を作った」のでしょうか。

わたしは後者、すなわち顔がその人の性格を作った可能性がかなりあると思っています。たとえば陽気であると周りから見られている顔のもち主は、周りの期待に応えて自然に陽気に振る舞おうとします。そして次第に自分自身も陽気な性格だと思い込むようになります。もしかしたら、性格は、顔を通じて周りの社会が作っているのかもしれないのです。

わたしは、顔は決して独立に存在するものではなく、見る人と見られる人の関係のなかにあるという立場をとっています。さらに言えば、顔だけでなくその人の性格もまた、社会や文化との関連で作られていくものなのです。顔と性格、この関係だけを見ても顔学はむずかしい・・・これがわたしの実感です。

月刊みんぱく

目次

JUNE 2008
月刊みんぱく 6

01 エッセイ　世界へ世界から
顔から性格がわかるか？
―顔学と人相学―
原島　博

02 みんぱくインタビュー
民族学の枠を超えて
ヨーゼフ・クライナー
中牧 弘允

08 モノ・グラフ
メコンの筌（うけ）から柴漬（しばづけ）漁、そして日本のいかかご漁へ
橋村 修

10 地球ミュージアム紀行
国内移民の声なき声
金子 正徳

11 表紙モノ語り
涙壷
山中 由里子

12 みんぱくインフォメーション

14 万国津々浦々
パプアニューギニアの選挙のお守り
市川 哲

15 人生は決まり文句で
ずるがしこい奴―ティゲレ
窪田 暁

16 外国人として生きる
僕たちの人権運動
―日本の若いマイノリティたち
吉冨 志津代

18 歳時世相篇
③ワールドカップ
あの素晴らしいときをもう一度
太田 心平

20 生きもの博物誌
猟がうみだす森のかく乱環境
笹岡 正俊

22 フィールドで考える
アフリカの手話のルーツを訪ねて
亀井 伸孝

24 みんぱく ウィークエンド・サロン
研究者と話そう
次号予告・編集後記

※表紙解説は11ページ